
アデライード

市川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アデライド

【Nコード】

N9232Z

【作者名】

市川

【あらすじ】

聖エルンスト高等学校の正門前に着いたとき、父はエンゲルの手をついに離れた。短い旅の終点がきたのだった。離れてしまった手の間を、冬の風が冷たくふきぬけていった。いま、世界はあらゆる色を喪って、この親子の上に落ちかかってくるようだった。

（本文より）

序章

【0】

聖エルンスト高等学校の正門前に着いたとき、父はエンゲルの手をついに離れた。

短い旅の終点がきたのだった。離れてしまった手の間を、冬の風が冷たくふきぬけていった。いま、世界はあらゆる色を喪って、この親子の上に落ちかかってくるようだった。

このとき、その一瞬の冷たさが彼にちよつとした悲しみや切なさをもたらししたが、それでも彼はかたくなに唇を引き結んでいた。何か言うことはしなかった。心にはとうにあきらめと絶望とが渦巻いていて、真冬の木枯らしのように吹き荒れていた。

いまや何を願ってもどうにもならないのだということを少年は知っていたし、断頭台のうえに引き立てられた囚人が、もはや泣くことがわめこうが首を切り離される運命にあるのだということに疑いがないように、自分の運命がこの白亜の正門のまえに投げ出されていることをも知っていた。それは、今たしかに目に見ることができた。取りだされたばかりのいけにえの心臓のように赤く、ほふられた子羊のようにぐったりとした、ちっぽけで、それでもある種のとうとさを持った、自分の運命というやつ姿だった。

「ここなの」

「そうだ——」低い声が答えた。「ここがそうだ」

父はずつとうわのそらで、うちを出てから一度もエンゲルの顔を見ようとはしなかった。今もそうだった。父の声はよそよしく、ぎこちなかった。そむけたままの横顔にはびこっている無精ひげと、

耳の後ろにある二つのほくろが、いま、エンゲルに見える父の姿だった。

「中に入ったら、校長先生の部屋に行つて、その……話をするんだ。これからのことや、説明なんかを。わかるな？」

エンゲルは小さな声で「うん」と答えた。

本当はよく分からなかった。なにもわからなかった。それでも分からなければならないということ、あるいは分かったふりをしなければならぬということをつかっていたので、彼はそうしたのだ。運命の無慈悲な手に襟首をつかまれた者は、ただうなだれておとなしく言うことをきくほかに、できることなど何もない。まっとうな人間に与えられうるすべての幸福な未来から自分たちは切り離されて、それだから今、ここにいるのだ。少年はそのことだけを知っていた。

父はそれから、重たくて擦り切れたコートのポケットをごそごとさぐり、何かをとりだして、エンゲルの手に握らせた。それはいくらかの小銭だった。父は穴のあいた手袋をしていた。

エンゲルが手の中のじゃらじゃらを見つめていると、父の手がのびてきて、かれのぼんやりした指を無理やり閉じさせた。そしてエンゲルの着ている新しい制服のポケットに突っ込んだ。エンゲルはずっと何も言わなかった。

父は溜息をついた。そしてエンゲルの正面にまわり、息子の両肩に手をのせた。こうして向き合うつと、かれはとても久しぶりに父の顔を見た気がした。ぼさぼさで、無精ひげだらけで、疲れ切つていて、まるでうすぎたない浮浪者みたいだ――。この人は、いつからこんなふうになつちまったんだろうか。思い出せない。でも、こんなにくだびれて、よごれきつて、ちっぽけだ。顔立ちは似ているはずだが、もうよくわからない。ただ深緑の目の色ばかりが自分と同じだ。

父はゆっくり、しわがれた声で吐き出すように言った。「お前は最初、おれの希望だった」

エンゲルは、じつと聞いていた。

「十四年前だな、そうだな？ あの前でもない女が逃げた。置き土産を残してな。おれは怒ったが、同時におれは考えたんだ、赤ん坊のお前を前にして、ひよっとしてお前の面倒を見ることで、真人間になれるかもしれないと思った。少しぐらいはやり直せるかもしれないと思ったんだ。だが駄目だった。どうだ、おれは何一つ変わらんな。お前はおれをまっとうな人間にしてはくれなかった。だがおれはお前を責めたりしない。だってお前は悪くないからな。だからお別れするだけだ。さようなら、おれのエンゲル。おれがお前をそんなふうに呼ぶのはこれが最後だ、いいな？」

「はい、お父さん」

エンゲルの返事をききとどけて、父は両手を離した。肩はふっと軽くなり、同時に、少年はなにかとても大切なものが失われたことを知った。

「お前がおれをそう呼ぶのも、最後だ」

父はもう振り返らなかった。擦り切れたコートの裾を揺らして、木枯らしの中を、うつむき加減に去っていった。うちへ帰って行っただではなく、あの人はもう自分の知らないどこかへ去っていくのだということ、エンゲルは知っていた。あの人は去るのだ。だからもうどこへ行っても会えることはないのだし、あとはお互い、べつべつなものを食べ、べつべつなものを見ながら、最後の日まで、べつべつの生き方をするだけなのだ。これは永遠のお別れにちがいない。父の背中を、踊る枯葉が何枚も追いかけていった。

こげ茶色のうしろ姿が見えなくなったところ、門が開く音がした。エンゲルが振り向くと、森にかこまれた古城のような聖エルンストのポーチの奥から、上品なスーツ姿の紳士が歩いてくるところだった。ああ、この人がそうなのだ、とエンゲルはおもった。父に棄てられたかわいそうな僕をひきとつてくださる慈悲深い校長先生とやらが、この人なのだ。

彼はエンゲルを見るや、鷹揚に両手を広げて歓迎の意を表した。

「エンゲル・ミューラー？」と尋ねる声は、その姿とおなじように上品で、とてもあたたかく、柔らかだった。

「一人かね？」

彼は少し不思議そうに、エンゲルを見た。

「はい」

エンゲルは、ただ一言、そう返事をした。

第一話

【1】

新緑に木漏れ陽が散っていた。さながら白亜の古城のような聖エルンストの外壁に、それは美しく降りそそいだ。

エンゲルが何気なく「まるで光のシャワーだ」というと、「もう五月だもの」と、隣を歩いているオリバー・デーニッツが気さくな様子でほえんだ。それから肩をすくめて、こう付け足した。

「素晴らしいね。君が言うと、なんでも詩的に聞こえちゃうんだな」
「よしてくれよ」

「どうしてかね。僕が同じこと言っただって、君のようにはないだろうな。やっぱり見てくれというものはその人の評価に大きく影響するもんだと思うかい、エンゲル？」

「僕をからかってるなら、きかないぞ」

僕はこれでも女みたいな顔だつてことを気にしてるんだぜ、とエンゲルが片方の眉を上げてみせると、オリバーは面白がるように、へえと目を丸くした。愛嬌のある顔がことさらひょうきんになった。「それじゃ僕と取り替えようぜ、その顔さ！ そしたら毎週外出許可をもらってさ、街でガール・ハントとしゃれ込むんだ。きつとなびかない子はいないぜ、よっぽど好みが偏つてなけりゃね」

エンゲルはあきれ声を出した。「僕の顔がなんだつて？」

「そりゃあ、きみは滅多に外出しないものな。いいかいエンゲル、世間つてのはこの監獄みたいな聖エルンストを出たところにあるんだぜ。世の中には女の子つてものがいてさ、君みたいな顔をした奴のことがたいてい好きで、そのうえ何から何まで不思議だらけの生き物なんだ。まるで砂糖菓子そっくりさ。うっかり食べ過ぎると虫歯にかかっちゃうところまでね。でもたまらなくいいもんだよ。知

っている？」

「興味ないね」

オリバーは頭をかかえておおげさに叫んだ。「神よ！」

「きみってやつは、辞書で引いたみたいな優等生なんだからな。いったい何が楽しくて、この二度とない青春を生きてるんだ？」

そう言いながらオリバーの白い手が後ろからのびてきて、エンゲルの首にまきついた。彼はこの年頃の少年の多くがそうであるように、親密な相手にはすぐ手をのばして触れたがるたちだった。自分と同じように骨っぽいからだをした同級生が触れてくるくすぐったさに、エンゲルは笑って身をよじった。「離せよ、ばか！」

「みんな君のこと噂してるんだぜ、東館の堅物ってね。ここに来てもう半年にもなるのに、罰則のひとつもくらったことがないなんて奇跡だよ」

「学校つてのは自律の精神を教えてくれる場所だと思っただけだね。そうじゃない、先月は二度も罰則をくらって、今週末の外出許可が取り消しになったオリバー・デーニッツ？」

エンゲルがやり返した。オリバーはとたんに顔をひきつらせて、のどがつつかえたような声を出した。「ひどいや」

「どうだか」

「僕を憐れんでくれよ、エンゲル！ だからきみにこうして——僕らの頼れる舎監生であるエンゲル・ミューラーに、真正面からお願ひしてるってわけじゃないか。君ときたら、ワイロのひとつも受け取ってくれやしないんだから」

オリバーが手を緩める。その隙に、エンゲルは体を反転して自由になる。

ちょうど向き合うかたちになって、乱れた髪と首元のタイを直しながら、彼はわざと首をかしげて、何のことかわからないというふりをした。オリバーは雨の日に棄てられた仔犬だつてもうちよつとましな目をするだろうというほど情けない顔をして、ばつ悪そうに手を後ろにやってもごもごと口元を迷わせた。「きみの言うことな

ら、先生も無視しやしないだろ」

「さてね」

エンゲルはあくまでもそらつとぼける。オリバーはたまらずに泣きついてきた。

「頼むよエンゲル、先生にかけあってくれ！ 今週末はどうしても約束があるんだ、ベルタって可愛い子でさ、うまくいきそうなんだ。この僕が！」

「珍しく？」

エンゲルは皮肉のつもりで口にしたのだが、オリバーは大いになぜいた。

「そうさ、彼女、僕に好意を持ってるんだ。こんな奇跡、二度はないって断言できるね。今週末に会えるかどうか勝負なんだよ」

「愛には障害も必要だってね。クラウディオ・デユフナーが言ってたよ」

ひょうきんな顔を忙しく回転させて、オリバーは悲鳴じみた声をあげた。

「あんな嘘つき野郎と僕をいっしょにするのか？ あいつはもてるから、言い寄ってくる女の子をかわすためにそんなこ言っのさ。僕は違うよ、だって——」

しばらく熱弁につきあってやった後、聖エルンスト高等中学始まって以来の優等生は、この悪友のためについに折れた。「考えとく」それを聞くやオリバーは、文字通りとび上がって喜んだ。頼んでもいないのに、エンゲルの手から教科書一式と筆記用具をひたつて走り出し、「恩に着る！」と叫んだ。「これは僕に持たせてくれ！ ほかに重たいものはないか？ 今日は天気がいよいよだけど暑いなんてことは？ その上着はどうするの？」

彼は、エンゲル・ミューラーから「考えとく」の一言を引き出すことに成功したときは、ほとんどの場合においてよい結果がもたらされることを知っているのだった。何かにつけこの調子だから、彼はどこに行ってお調子者と呼ばれる。だが、その言葉には一片の親し

みと愛情とがある。彼を心から嫌いになれるものは、この広い校舎のなかにはいないにちがひなかった。いつだって彼のほがらかさと魅力的なブラウンの目は、そのとき相対する誰かの心の中に、いとも簡単に入り込むことができた。彼が口にするちよつとした冗談は、それを聞いた誰もかれもの眉をほんのちよつぴりだけ下げるのに役立った。そんなデーニッツの憎めないところを、結局のところエンゲルもまた嫌いになれず、それだからこうして隣り合つて歩くことがしばしばあるというわけだった。彼らはよい友人どうしだった。

それでもエンゲルは念を押した。飛び跳ねながら前を行くオリバーの背中に向かって、

「僕は考えとくつて言つたんだぜ。よく考えた結果、やっぱりこんなやり方は君のためにならないと思つて、先生に別のお願ひをすることもあるかもね」

「エンゲル、そんな！」

オリバーがひっくりかえつたような声をあげて立ち止まつた。振り返つた顔が真っ青だ。

二人でしばし顔を見合わせ、やがて少年たちは、どちらからともなく笑いあつた。

*

オリバーを先に戻らせてしまうと、エンゲルはひとり中央棟にいらした。この半年の間にすっかり慣れ親しんだ聖エルンストのなかには、もう目をつぶつても目的の場所にたどり着くことができた。廊下のじゅうたんの踏み心地、壁のてざわり、手すりの磨き込まれた艶までが、いまや彼のものだった。

途中、幾人もの生徒とすれ違つたが、みなエンゲルに親愛のこもつた挨拶を投げてきた。「やあ、ミユラー！」と気さくに呼びかけ

てくる者もあれば、意味深な眼を投げてくる者もいた。このあいだノートを貸してやった上級生は、「先日は助かったよ、今度お礼をさせてくれ!」といって肩をたたいてきた。彼は落ち着いた笑顔をうかべて、ひとりひとりに手をあげて応じた。そうすることが重要だった。そうして、悠々と廊下を歩きつづけた。

やがて一つの扉の前で彼は立止った。まるでこの部屋の住人を象徴するような、りっぱな獅子のレリーフの扉を二度ノックすると、なかから「どなたかね」と低い声がした。「エンゲル・ミユラーです、ヘル・エドゥアルド」

「お入り」

エドゥアルド教師は立派な机で書き物をしていた。思えばいつもそうだった。この先生が、たとえばソファでくつろいでいたり、うたた寝をしたり、靴下を脱いで背伸びしたりしているところを、誰も見たことがない。タイをほんの少しゆるめたところすら、誰も見たことがない。

教師の机は窓を背にしているのでひどい逆光だったが、エンゲルはまぶしさを顔に出さなかった。静かにエンゲルが入室すると、彼は少し顔を上げ、厳格な灰色の目でエンゲルを真正面にとらえた。彼のこの目ににらまれて、震え上がらない生徒はいなかった。むしろ、ただひとり、エンゲル・ミユラーを除いては。

「何か用かね、エンゲル・ミユラー? 先日のレポートなら、いま採点をしているところだよ。返却はもうしばらく待ちたまえ」

エンゲルは扉を後ろ手に閉めて、肩をすくめた。

「そのことじゃないんです」

「まあ待ちたまえ。これを済ませてしまおうから」

エドゥアルド教師は入り口のちかくの、来客用のソファを目で指した。エンゲルは言われたとおりにした。それから、何気なく室内を見回した。天井には琥珀色のシャンデリアが吊り下がっている。本棚にはびっしりと蔵書がならんでいる。床のじゅうたんは少しくすんだブドウ色。とても品のいい色だと彼は思う。エドゥアルド教

師が向かっている机には、このあいだエンゲルが書いて提出したレポートが載っている。その隣には、白磁のカップがある。

「よければ、お茶をお淹れしましょうか。カップが空では？」

「できるかね？ これは――」

「サモワールの使い方は知っています」

「ならお願いしよう」

エンゲルは立ち上がり、てきぱきと準備を始めた。サモワールに火を入れる。ひとそろいの道具を並べ、戸棚からジャムのびんを取り出し、スプーンの準備をする。しばらくすると部屋に紅茶の香りがただよいはじめた。すばらしい香りの茶葉だった。うんと高価にちがいない。こういったものに妥協をゆるさないのは、いかにもこの厳格な教師らしいとエンゲルは思った。ふと顔をあげると、エドワード教師はいつしか採点の手をとめて、じっとエンゲルの手元を見ていた。「どこで？」

「父が使っていました」

エンゲルは笑顔で返事をした。「僕の父は、若いころにたくさん旅をしたので、いろいろな国のお茶の作法を知っています。これは一年ほどロシアにいたときに習ったのだと言っていました。ジャムやハチミツを好きなだけ食べてもいいんだって……ときどき子供みたいなことを言っんです」

「いい手順だ。お父さんに習ったのかね」

「はい」

「続けたまえ」

エンゲルは手元の作業にもどった。

香りののぼるカップを盆にのせてそばに行くと、エドワード教師は「ありがとう」と言って受け取った。「ジャムはどうなさいます？」

エドワード教師はジャムを所望した。エンゲルは多くも少なくもなく、ちょうどいいひとさじ分を掬って差し出した。教師はついに、「それで、今日は何の用かね」と口にした。「個人的な用件か

ね？」

「お話をさせていただきたくて」

と、エンゲルははにかんだような笑顔を作って切り出した。

「その……先生は、若い男女の——とりわけ僕らのような年齢の子供たちの異性交遊について、どう思われますか？」

エドワード教師はめずらしく、片眉を上げた。少しばかり怪訝な顔をしたように見えたが、すぐにいつもの厳格な表情にもどり、よどみなく答えた。「健全な男女の交流が、必ずしも青少年に悪影響があるものとは思わんよ。もっとも、われわれの時代にはそう考えられているようなふしもあつたがね。だが五十年前の考え方が今の世に通用するとは思わん。大いにやりたまえ」

エンゲルは胸に手をあてて、いくらかおおげさな様子で「よかった！」といった。

「問題は、恋の魔力が強すぎるってことなんです」

「というところ？」

「僕らのような未熟な青少年には、とても抗えるようなもんじゃない。女の子のほほえみや、白い手や、髪の毛の香りは、たちまち僕らを虜にしてしまうんですもの。頭の中は彼女のことでいっぱい、もし振られたらどうしよう？ 勉強に身が入らないなんてことに、覚えは？」

「誰の話をしているのかね。どうも君ではなさそうだが、エンゲル・ミユラー」

「いま、まさに花をつけようとしている恋の若芽があるとして——」

「まわりくどい表現はよしたまえ。誰のことだね」

「オリバー・デーニッツです」

エドワード教師は嘆息した。「そういったことにばかりずいぶん勉強熱心なようだね、彼は」

「まさに花をつけるか枯れてしまうかの瀬戸際に置かれた哀れなすずらんです。もし今週の待ち合わせに行けなかったら、相手の子は二度とオリバーに会おうとは思わないでしょう。彼は告白をするチ

ヤンスさえ永遠に失ってしまうんです、先生！ もし——どうか、彼の外出取り消しを撤回してくださったら、レポート十枚でも彼はよろこんでやると思うんだけど、どう思われますか？」

「本気かね？」

「僕だつて友人の恋を实らせたいと思うことくらいはあります」エングルはほほえむ。「恋の誘惑を知る青少年のひとりとして」

しばらく経つて、教師は長いため息をついた。

「今回はこのお茶に免じよう」

「ありがとうございます、先生」

「ただしオリバー・デーニッツ、彼はいかん。未熟な青少年であることを理由にするには、いささか羽目はずしすぎる場所がある。これは寮長である君も認めざるをえないと思うが、そうだな？」

エングルははいと言つてうなずいた。

「レポートの出来によつては、二度と私の慈悲を期待できないと思いたまえ。そう伝えなさい。さがつてよろしい」

エングルは折り目正しく一礼して、彼の前を辞した。

部屋を横切り、扉に手をかけたところで、後ろからエドゥアルド教師の声が追いかけてきた。「美味しいお茶をありがとうございます。お父さんは、よほどきちんとした教えを君に授けたのだな」

「ありがとうございます」

「家族を大切にしたまえ。お茶の習慣を愛するすべての人は、必ず深く理解しあえる」

「父も同じことを僕に言います。家族は僕の誇りです」

「下がつてよろしい」

もう一度振り向いて礼をしたとき、エドゥアルド教師はすでに手元のレポートに目を戻していた。エングルは邪魔にならないよう、そつと扉を閉めた。そうしてから、そのままの姿勢で動きをとめた。獅子のレリーフの、空洞の眼が彼を見ていた。

——家族は僕の誇りです。

彼がそうしていたのは一瞬のことだった。

突き放すようにドアから手を離すと、きびすを返し、規則正しい足音とともに廊下を歩き出した。このときオリバーのことはもう忘れていた。エドワード教師に言ったことも、言われたことも半分以上はどうでもよかった。それに彼は恋の誘惑なんて知らなかった。西日の射す廊下を歩きながら、彼はじつと自分の手のひらを見つめた。

ロシア式紅茶など淹れたのは今日が初めてだった。

第二話

【2】

部屋に戻ると、彼の机の上にはどこかの誰かさんが持っていたはずの筆箱と教科書が、いやでも目に付くように、きれいに端をそろえて置いてあった。小さな子供が、ママに褒めてもらうために何か他愛のないことをやりとげて、その結果をよく見えるところに見せびらかしておくときの、あの感じだった。エンゲルはそれらを目の端で見やり、首もとのタイをゆるめた。

その誰かさんかというと予習もせず、自分のベッドの上にあぐらをかいて、顔面いっぱいにはこにこ笑顔をはりつけているところだった。

「何さ？」

わざとそっけなくエンゲルが聞くと、オリバーは真っ白い歯をのぞかせて、声をひそめて「うまくいったんだろ？」といってきた。こんなときのオリバーは、まるでとっておきのいたずら話をするように活き活きとしている。

「それでなきや、きみが戻ってくるはずがないもの」

「僕を買いかぶりすぎてるんじゃないの」

「プライドの問題さ」

オリバーはベッドにごろりと寝そべり、うきうきとした声を出した。「それで？」

「二十枚」

とたん、後ろでオリバーのかたまる気配がする。ぬけている彼も、さすがにこのときはかりは理解が早かった。なんのことが、すぐにわかったようだ。

かまわずに背を向けたまま、机のうえを片付けながら、エンゲル

はつづけた。「レポートを二十枚。それが交換条件だとき。いいじゃないか、今週末の外出はできることになったんだから」

ふりむいて、付け足す。「まあ、外出できれば、だけど」

「エンゲル！ きみ——」

「あのねえ、オリバー」

彼は指をつきつけた。「きみ、よそでパンを買うとき、お金を払わなかったことがあるの？ 僕や先生がとくべつ意地悪なわけじゃない。なんだって、ただってことはないんだよ。世の中はとりかえっこでできてるんだ。それだけの話さ。わかる？」

「でも、それじゃあ、僕の今週の予定がレポート書きで埋まっちゃうじゃないか？」

「君しただいよ」

エンゲルは肩をすくめる。「一日五枚も書けば、すぐだよ。今日はまだ火曜日だもの、じゅうぶん間に合うじゃない」

友人はあんぐりと口をあけて、たっぷり十秒間、かたまった。その間にエンゲルは上着を脱いで、ハンガーに掛け、ブラシをかけていつものところにきちんともどした。そのすぐ近くにオリバーの上着が脱ぎ捨てられてあるようだったが、それは無視することにした。それから引き出しをあけ、いつもの鍵とマツチがそこにあることを確かめた。消灯のあと見回りに行くときにつかうのだ。何も問題がないことをみとめ、鍵だけをとりだして、エンゲルは引き出しを静かにしめた。

そこまで済ませたころ、ようやくわれにかえったオリバーが上目遣いにおずおずとした調子でたずねてくる。「その——もちろん、ここで見捨てやしないよね？」

エンゲルはなんとなく手の中の鍵を放り投げたり受け止めたりしながら、「今なら取り消しがきくかもよ。どっちがいいか、よく考えたら」とだけ答えてやった。

それを聞かされるやオリバーは、ベッドにあぐらをかいたまま、ばか正直に悩みはじめた。この取引をなかったことにしてもらうか

（もつとも、それは教師の性格からしても得策とは思えなかったが）レポートを週末までに仕上げるかを本気ではかりにかけているらしかつた。彼のこういっただころがエンゲルは嫌いだはないが、ばかみたいな課題を手伝って週末をつぶしてやるほど好きでもないというところだつた。

見切りをつけて、彼は声の調子をかえた。

「それじゃ僕は食堂に行くけど、きみはいつまでそうしてるの」

「もう？　だつて——」

彼はきよんとして、壁かけ時計に目をやつた。「まだ五時半だよ。おなががすいたのか、エンゲル？」

「これだものな、きみてやつは。このうえ当番をさぼつたりしたら、もうレポートを百枚書いて提出したつて許してなんかもらえないと思うけどね」

「ああ、そうだ、僕！」

オリバーは叫び、文字通りベッドの上でとびあがり、それから転がるようにとび降りた。まったく彼の動きときたら、いちいちこつけないことこの上なかつた。

「僕はもう、君への貸しをいちいち数えるのをやめたぞ、オリバー」
エンゲルはふりむいて、にっこりした。

それからドアに向かい、早く来ないと置いていくぞ、そればかりか外から鍵をかけちまうぞというふうに、指にひっかけた鍵をくるくるくると回してみせた。彼の指の白くて長いことは、一部の生徒のあいだで有名だつた。

後ろからオリバーがあわてて追いかけてくる気配がした。エンゲルはそれを待たずにドアを押し開けて、つま先だけで固定した。

「そう、言い忘れてたけど、オリバー。先生から伝言だ」

哀れなオリバーは、こけつまろびつ上着を着なおしているところだ、「へ？」と間の抜けたような声をあげた。エンゲルはつづけた。「レポートの出来によつちや、二度と外出は出来ないと思え、だそうだよ」

オリバー・デーニッツは、ぽかんとしたあと、上着が裏返しなのにも気づかないで、

「あんまりだ！」と叫んだ。

*

時計の針が十時をさすころ、エンゲルは予習をやめた。

彼がそつと椅子を立つと、すでにベッドに寝転んであたためたミルクをちびちび飲んでいたオリバーは顔を上げ、「時間かい」といった。エンゲルは黙ってうなずいた。

机の横に準備しておいたランプをとりあげ、引き出しからマッチを出して、灯を入れた。もう何度も何度もくりかえしていることなので、呼吸をするのと同じように、彼の手は勝手にうごくのだった。「きみ、僕が戻るまで起きてる？」

「わからない」

「いいさ。僕の机の灯りはこのままにしておいて」

エンゲルは上着を着込んだ。初夏の夜はもうそれほどさむくはないけれど、彼がこの部屋から外に出るときにきちんとした格好をしなかったことはいちどもなかった。彼は巡回に行くとき、必ずタイと上着とをきちんと身に着けた。

「しかし生真面目だね、君は——」

「君ほどじゃないさ」

オリバーのねむたい目に見送られて、エンゲルは廊下に出た。静かだった。

異常は、東館の三階の廊下でみつかった。

ちょうど階段の陰になるところだった。手にランプをもって、青白い夜のなかを巡回していたエンゲルは、そのことに気がついて注

意深く足を進めた。前方に人影があつた。それは夜の闇に、うごめくように盛り上がった。ひとつではない。ふたつだ。寄り添うように、かたまるように、影がある。

ごく近くまで近づいてから、わざと足音をたてた。人影のひとつが飛び上がり、もうひとつも少し遅れてとびあがつた。エンゲルは黙って近づいていった。窓からは月光もささず、エンゲルの持つ古いランプの、琥珀色の灯りだけが、そこにあるものを浮かび上がらせていた。

「もう消灯時間だよ」

エンゲルはしずかに声をかけた。腕をのばして前にランプを掲げると、そこにいる二人が誰だか知れた。ひとりとは同級生のディータ・ロベルト、もうひとりは一学年下の――エンゲルは一瞬考えて、彼の名前がミハイル・シューベルトだということを思い出した。

なににせよディータ・ロベルトとはやっかいだ！ エンゲルは顔に出さないままそう思った。彼はあまり相手のしやすい生徒ではなかったからだ。

ふたりは、まるで抱き合っているように、ぴたりとくっついていて。そしてそのまま、エンゲルのほうに向き直った。家人にみつかったどろぼうのように、ふたりとも青ざめていた。

「消灯は十時だ。部屋に戻りたまえ」

事務的な口調でそういうと、二人はなぜか少し安堵したようだった。愛想笑いのようなものをうかべ、それからひどくよそよそしい様子で立ち上がり、何か口の中でぶつぶつ言いながら、エンゲルの横を二人とも足早にすりぬけた。悪かったね、ちよつと話に熱がさしてね、云々。ディータは右、ミハイルは左、まるで川の流れが石をよけて流れるようにそそくさと、通りいっぺん謝って、そのまま立ち去ろうとした。

彼らが川の流れのようにいかなかったのは、ちよつとすれ違う一瞬に、エンゲルの両手が二人を強くおしとどめたからである。

彼は左手にランプを持っていたので、ミハイルのことは腕全体で

抱きとめるようになつた。ミハイルは学年でも飛びぬけて小柄で、華奢な生徒なので、背の高いエンゲルにはどうということもない芸当だった。ただ彼にランプがあたつてはいけなかったので、そこだけは一瞬氣をつけた。

いっぽうのデーターは背高で体格もいいので、通り抜けざまに腕をつかんだ。彼は後ろに転びかけ、日ごろ体育の授業で鍛えた足の強さがなかったら、あやうく倒れこむところだった。

エンゲルはそのまま、静かに告げた。

「ただし、今していたことを白状してから」

二人がぴしりと凍りついた。エンゲルは横目で二人を順繰りに見やり、「たばこを吸っていたね。ごまかしてもだめだ。今持っている分を、出して」ときびしい口調で命令した。

しばし息苦しいような沈黙があり、先に折れたのはミハイルだった。彼はおずおずと、ポケットから出したたばこをエンゲルに差し出した。そして、「正直に言つたよ、先生には黙つてくれる?」と、哀れっぽい声を出した。

エンゲルは返事の代わりにデーターを見やった。すると彼は氣丈にも、この天下御免の優等生をにらみ返してきたが、エンゲルがもうひと睨みすると、観念したのかポケットの中に手をつ込んだ。彼の大きな手はいかにも無造作にミハイルの倍のたばこをつかみ出した。どうやらこの小柄で氣弱な同級生をちよつとした悪事の誘惑で釣つたのは、データーのほうであるらしかった。

彼はとつくに声変わりを終えた、特徴的な低い声で、ぼそりといった。

「先生に言うのか」

「今日がはじめてかい?」

ミハイルがちぎれそうなほど首を縦に振る。天使みたいなくなるる巻き毛が、そのたびに揺れる。「データーは?」

「どうせ君は、俺の言うことなんて信じないだろうがね、エンゲル・ミユラー」

エンゲルは肩をすくめた。これはあきれた強情っぱりだ。

デュータ・ロベルトは、エンゲルが転入してきた時からずっと彼にある種の敵意を向けてきていた。その理由はエンゲルには分からなかったが、どこにだって優等生をやつかむ者はいるものだから、さして気に留めていなかった。だがこの期に及んで往生際の悪いこの生徒に、少しあきれる気持ちかわいてきた。「きみがどうして僕をそんなふうにするのか知らないけど、信じるかどうかはまず話を聞いてからだ」

デュータはランプの灯りからにきび面をそむけ、しゅしゅと、「むしゃくしゃしてんだ」といった。

「なぜ？」

「君のせいだ」

返事は端的で、明確だった。

「理由にならない」

「なるさ。君が転校してきたからだ」

「成績の話かい？」

「成績も、全部だ」

デュータのぶつ切りのような話し方は、少しずつ厳しくなった。

感情を押し殺したような低い声から、だんだんとたがが外れ始めた。「君なんか来なけりやよかったんだ。君のせいで俺は一番じゃなくなった。君のせいで友人からの信頼も失った」

「僕が君からそんなもの奪ったって言いたいのか？」

エンゲルの声が軽く調子上がりになった。「僕は、一度だって君から友達をとってやろうなんて思ったことはないよ」

「君がなくても、結果としてそうなのだ。みんな俺よりも君のほうを好きになった。わからないところがありや君に訊くようになった。君が転校してきたのが悪い」

ミハイルが心配そうに二人の顔を見比べていた。彼はここでこの舎監生におかしなことを言って、へそを曲げられやしないかとおびえているようだった。

「……とにかく、たばこはこれで全部なの、データー」

エンゲルは大きくため息をついて、肩を上下させた。なんだかひどく疲れたような気分だった。データーはだまってうなずく。ミハイルはまたしても、何度も何度もうなずく。

「データー。君は僕がここに来たところから——半年前から吸っていると思うていいのかい」

データーは返事をしない。エンゲルがもう一度、今度は声に威嚇をにじませて「データー」というと、彼はうなるような声で、「三月ほどこだ」と答えた。「君が俺の目に付くようになってから」

「わかった」

エンゲルは二人の手からたばこを取り上げ、手の中にぎりつぶした。

「今度だけは目をつぶる。ただし君に同情したのじゃないから、そのつもりで」

とたん、データーの声が爆発した。

「ミユラー！」

エンゲルはびっくりしてデーターの顔を見た。

「先生にちくればいいじゃないか！ ええ、優等生さま！ それでご立派な態度を見せたつもりかい！」

見逃されたのがよほど気に入らなかったのか、爆発するように声を荒げるデーターに、ミハイルが必死でとりついた。「静かに！ データー、どなったりしないで、みんなが起きる！」彼の華奢な腕がまきついて、データーの胸回りはそれよりも太かった。

「俺は君のようなやつが一番嫌いなんだ、家族に恵まれて、成績だって、なんだって優れているのに、自分ではまるきりそんなことに気がついてないようなおすまし顔をしてやがる！ なあミユラー、俺の父と母が今どこでどうしてるか教えてやろうか？ ——あの世さ！ 夜通し喧嘩したあげく、二人仲良く、俺を置いて逝っちまった！ 俺は奨学金をとってここに来てるんだ！ もし一番じゃなくなったりしたら——成績が下がったりしたら——どうなると思う、

エンゲル・ミユラー？ お前が俺から一番を奪ったりしなけりや、俺はたばこで憂さを晴らすことなんて覚えていなかったろうさ——」

エンゲルはだまって背を向け、歩き出した。

うしろから声が追いかけてくる。

「お前はなんでも持っているのに、ひとつだつて俺にゆずってくれやしないんだな！」

「データー！ やめてよ、せつかく見逃してくれるっていうのに、君がそんなふうにならわいだら僕までとばかりをくうじゃないか！」
ミハイルの泣きそうな声がした。ふりはらわれて、彼がしりもちをついた音も聞こえた。エンゲルは手の中のたばこをにぎりしめた。もしそれができるなら、今すぐ振り向いて、こんなもの、ずいぶんと馬鹿馬鹿しいじゃないか、と笑ってやりたい思いもした。

こんなもので——こんな数ペニヒの代物で、僕はここにいる無数の生徒の弱みを握ることができるのだ。僕の気持ちひとつで、見逃してやることもできるのだ。感謝されようなどと思っちゃいけない、これは僕の気まぐれなのだから。言つたろう、同情なんかしちやいない。なあデーター、わかるかい？ きみはそれがさぞ気に入らないのだろうが、知ったことか！

気づけば、もうデーターのわめき声は聞こえていなかった。ミハイルが引つ張つていったのかもしれないし、あるいはミハイルを置いていつちまったのかもしれない。どうでもいいさ、とエンゲルは思った。

このつまらない紙巻きがもたらしてくれるいつときの安息は、どんなだい、データー。少しは気が晴れるかい。醒めた後の気分はどれほどみじめなことだろうね、データー？

僕なら君よりもうまくやっているさ、見つかったりせずに、なあ、データー！

部屋にもどると、オリバーはもうすやすやと寝息を立てていた。

レポートの件がどちらに転んだか知らないが、すくなくとも今こうして寝ているということは、実に彼らしいことではあった。

エンゲルは鍵とランプを元の場所にもどし、別の引き出しを開けた。そして一瞬のためらいの後、そこから小瓶をとりだした。月明かりもない部屋の中、それはかろうじて琥珀色をしていた。

コニヤックを自分の机に隠してあることは、今のところ誰にも見つかつたことがない。彼が時々こっそりそれを取り出してのむことは、同室のオリバーも気づいていない。

彼は目をつぶって、瓶に口をつけた。強いアルコールをひといきに流し込んだ喉が、かっとなくなるのを、ここちよいとはこれっぽっちも思わなかった。

アルコールの力を借りてねむることを覚えたのは少し前のことだ。美味いと思つたことは一度もなかった。自分がそうしなければならぬという自覚もないままだった。ただときどき、こうしなければならぬような時がある、というだけのことだ。

データーはたばこが旨いのかな、と少し考えて、エンゲルはその夢想をとりやめた。

第三話

【3】

オリバー・デーニッツが『監獄みたいな』とふざけて評したこの聖エルンストが、エンゲル・ミュラーにとっては樂園にかぎりなく近い場所であつたという事実を、まず今のうちに述べておかねばならない。なぜなら彼はまさに『監獄みたいな』生活をせねばならないところを知っていたからである。そして彼はもともとそこにいたからである。

ハーゲンの寒い片田舎でそれは始まつた。空腹と、得体のしれぬおそろしさと、薄暗い灯りがすべてだつた。監獄だつた——そこは精神の監獄だつた！ 彼は自分を取り巻く冷たい檻を生まれてすぐに知つた。それは目に見えなかつたが、確かにそこにあり、強固で容易に打ち破れぬものだつた。だから凍り付いているほかなかつた。七つのころに望まぬことをおぼえ、十になるころには希望はおそろしいものだということを学んだ。

父はいつも酒を飲んでいて、飲んだくれては彼を打ち、なじり、わめくのだつた。それからときどき泣く人だつた。擦り切れかかつた芯のわずかな灯りに背を向け、両手で顔を覆つて、おいおいと父は泣いていた。そんなとき彼はそれが終わるまでじつとしていた。ひとしきり泣いた父はまた酒を飲み、酒を飲んでまた泣いた。父についておぼえているのはそれくらいのことだ。別れの日にくれた幾らかの小銭があの人のもてる慈悲のすべてだつたというなら、もはや縁などというものはそれっぽちの価値しかないのだ。父と息子などという言葉それだけに、どれほどの重みがあるものか。それが証拠に、親子の縁などというものはこのとおり、いともたやすく切れてしまつたではないか！ 思い出すことなどほとんどありはし

ない。もう忘れたのだ。あの人はときどき酒瓶の代わりに木炭を手
にしていた——だがそんなものはもう昔のことだ！

そこから連れ出されたあとで、彼になにが起こったか？ 生徒名
簿に名前が登録されてすぐ、立派な仕立てのよい制服と、シャツと
タイとが与えられた。靴も与えられた。二人共同ではあるが部屋を
与えられ、専用の机とベッドが与えられた。食事は決まった時間
にとることができた。それらはエンゲルが自分で何ひとつはたらき
けなくとも、生徒であることが決まったというだけで与えてもら
うことが出来た。校長は聖人のごとき寛容さをもってエンゲルを迎
え入れた。

この聖エルンストの前に置き去りにされたあの日、彼はなにを思
い浮かべたか？ 彼は、自分の行き先を予想したのである。それは、
このような制服に身を包んで、まっとうな生徒として過ごす日々な
どではありえなかった。この門の内側には決して入ることなく、そ
れは許されず、代わりにどこか別のところに行かねばならないのだ
ろうという漠然とした予想にほかならなかった。立派な門の前にひ
とり残されたとき、彼は思ったのだ、この内側にいる誰か、その途
方もない権利者たる彼らが自分に声をかけるなどということがどう
して起ころう？ 父の背中が遠ざかるのに、枯葉が父を追いかけて
ゆくのに、自分ばかりがこんな立派な門構えのギムナジウムの生徒
になるなんてことが、どうして起ころうか。

今すぐに立ち去らねばならないと感じた。彼はすぐにでも動き出
さねばならなかった。だがほんとうを言えば、少しぐらいは立ち止
まっていたかった——彼は（彼らは）昨晩からほとんど休んでお
らず、ここへ来るにも歩きづめだったからだ。へとへとだった。鉄道
はそう長く乗れなかった。彼らは二人で手を繋いで、長い道をひた
すら歩いてここまで来たのだ。どちらから繋いだのだけはよくわか
らなかったが、父のかさかさした手が触れたとき、無性に悲しかっ
たことはおぼえていた。ともあれ彼はここで少し休みたかった。だ
が、それが済んだら——つまり、この突如もたらされた環境の変化

について必要なことどもを飲み込み、必要最低限のあきらめをつけ
たら、まずはどこかへ行つて今日寝る場所を探さなければならぬ
のだろうという、ぼんやりとした、絶望に満ちた予感も同時にあつ
た。それは疑いもなかった。自分は、要は捨てられたのだから。

校長に話をしておいたという父の言い分を、どうして信じられた
ものか。お前は今日からこの生徒になるのだという話を、どう飲
み込めたものか。だって僕は捨てられたのだから！

ところがそれらの絶望的な予想は、ご存知のように、門の内側か
らあゆみよつてきた一人の紳士によつて、あっさりと、すべてひつ
くり返されたのだった。ロッテ・フランク校長は何もかも現実であ
ることをエンゲルに示した。そしてその日から、彼はほんとうにこ
この生徒になったのである。

ここでは、ねむる場所の心配も、食べるものの心配も、なぐられ
ることへの恐怖も、孤独も、寂しさも、未来をあきらめることへの
悲しみも、何も感じる必要がなかった。ただ守られていればよかつ
た。そのかわりにやらなければならないことは、ごく少なかった。
求められることの倍以上のものを与えられた。なんという楽園であ
ることか。

それから彼は解放され、開放された。忌まわしかったエンゲル・
ミューラーという名前さえも、その中身を変化した。隙間風のすさぶ
暗い家で、ただ縮こまるように、地面のなかの種のように、耐え忍
びながら父親と暮らしてきた十四年間で与えられなかったもののす
べてがここにあった。

エンゲルは幸福を知った。安寧と、安らぎとを知った。星と月と
闇に包まれてぐっすりねむる夜のすばらしいことを知り、朝日とと
もに目を覚まして、きょうはどんな一日になるだろうかと考えるこ
とのほがらかさを知った。やせ細っていた体は日に日に健康を取り
戻し、髪と肌につやが戻った。

それから彼は、生まれて初めて友人というものを知った。彼らと
話し合い、ふざけあい、同じものを読み、食べ、同じ空の下で生活

をし、日常のなかの些細なことどもに感想を言い合うことの楽しさを知った。はじめのうちはなにげない会話にさえ胸が躍った。それを気づかれぬように、わざと無表情を装ったりした。こんなにも楽しいことがこの世にあったなんて、自分はそれを知らずに長いこと生きてきただなんて！

彼は開かれた。エンゲル・ミュラーは、いわばここに来て、生まれて初めて『生まれた』のだった。彼の人生はここからはじまり、これ以降、すべて彼に帰属するよきものは、この聖エルンストのおだやかで美しい日々によつてはぐくまれた。

成績がよいのはあたりまえだった。彼はよく勉強をしたからである。彼はこの新しい生活に慣れるにしたがつて、過去を捨てることを考え始め、やがてそれを決意した。それはすなわち、彼が自分から能動的な希望を持ったことを意味した。

生まれたときから勝手に着せられ、ほかに代わりにするものがないから仕方なく着続けていたばるきれのような過去を脱ぎ去り、未来ある、めぐまれた十四歳の少年エンゲル・ミュラーとしてやり直すために、彼はまず優等生になることからはじめたのである。こういった目的を持つ人間は、かならずそれをやりとげる。彼らは一種ふしぎなはたらきによつて、ふつうの人間以上の力を発揮するものだからである。

さもありなん、エンゲル・ミュラーは優等生にならねばならなかった。それも完璧な優等生にならねばならなかった。それによつて自分をだますことが、いちばん最初にやらなければならないことだったからである。彼は自分を錯覚させた。未来を引き寄せ、過去を意志の力で作り変えた。僕は優等生だ。生まれながらの勝利者だ。家族に恵まれ、愛されて育ち、頭脳明晰で、幸福のなかに生きている優等生なのだ。

彼はそのための努力を何ひとつ惜しまなかった。その結果はやがてあらわれた。エンゲル・ミュラーはたちまち誰からも好かれる人気者となり、先生からは信頼され、友人たちから愛されて、春には

名誉ある舎監の役目をあたえられた。

美しいブロードや顔立ちは、いつしか崇敬の対象になった。もつとも、男子校では時としてこういった性質を持つ少年があらわれ、好奇心の的になることがある。彼のこのような点は、半年前にはじめて彼が姿を見せたときから生徒たちの度肝を抜き、その後もずっと水面下で噂され続けていたものだった——なにしろ彼は、エンゲル・ミュラーは、美しかったのだ。これは何度でも今のうちに繰り返しておかねばならない。彼は美しかった。

彼は下級生たちがこぞってエンゲルにあこがれているのを知っている。同級生のなかにも、エンゲルを特別な目で見たり、彼を女みたいだという者があるのを知っている。大いに結構。それが彼の結論だった。エンゲルが作り上げようとした『エンゲル・ミュラー』にとつて、それはひじょうに有用だったからだ。

つくり話などは、何の苦労もなかった。父親と暮らしていたときに、何度も夢見てはむなく打ち消した、理想の家族の姿をそのまま重ねればよかった。何ひとつ難しいことはなかった。ことばはこのとき、超越的なはたらきを彼と彼をとりまくすべてのものにもたらした。うそはもはやうそでなくなり、真実こそが虚構にとつてかわった。彼はそうして、過去を徐々に追い払い、やがてすべて放棄した。それはエンゲル・ミュラー少年の勝利の瞬間にほかならなかった。

彼は過去を駆逐したあと、現実をもぬりかえた。自分の半生をみずからの手で創造したことは、優等生になることと同じぐらい、あるいはそれ以上に慎重に、エンゲルがやりとげたことのひとつだった。

たとえば、家族である。世界中の旅の思い出や、ロシア式の紅茶の淹れ方を教えてくれた父と、美しく思慮深くやさしい母と、おませだが愛らしい妹と、それから犬が、彼の家族だった。彼らはエンゲルにほえみかけ、話しかけ、そこに実在するかのように彼を包み込む。否、彼らは実在した。もはやエンゲルにとつては、彼らこ

そが実の家族に他ならなかった。

半年前に、枯葉に追われるようにして去って行った男のことなど、彼はもうおぼえていない。おぼえているはずはない。夜眠る前に、エンゲルはそつとそのことを、自分自身に言い聞かせる。今頃はきつとイギリスにいるに違いない父に、おやすみなさい、とよびかける。

*

真夜中の出来事から数日ほど過ぎていた。六月の半ばごろだったかもしれない。何日、というよりも、何日でもいいような、ごく適当に選びだされたようなある一日だった。どこにでも転がっている一日だ。雨だったので、空がにごっていた。後ろのほうで誰かがおひるまでにやむかなあと言い、もうひとりがそれに答えて何か言った。エンゲルはどちらも聞いていたが、同じように空を見上げながら、さてどうだろうと自分でははかりかねていた。何しろ空がにごっていた。

礼拝堂から講堂へ向かうには、渡り廊下は一本しかないので、雨の日はこんなふうにゲルマンの大移動をやるはめになることがままあった。朝はみな授業が始まるまで決まったように動くので、なおさらだった。だから話し声が勝手に聞こえてきたりする。となりの友人に向けて話したことが、後ろのほうから返事が返ってきたりする。

ふりむけば、生徒をみんなぞろぞろと吐き出してしまった礼拝堂が、いつもどこかせいせいして見えるのがエンゲルには少しおかしかった。

彼がちらりと首をめぐらせようとすると、すごい勢いで後ろからやってきた何かが首にまきついた。それはもちろん誰かの腕だった

が、誰の腕かは考えるまでもなかった。すぐに耳元で声がした。「このあいだ、何かあったのかい？」

「何が？」

オリバー・デーニツツはエンゲルをふりむかせないようにしながら、自分だけ目線を後ろに向けて、「何がって……まさか気づいてないなんて言わないだろうね？ 僕見てたよ、礼拝のあいだじゅう、恐ろしい目で君のことにらんでいたんだから。デュータ・ロベルトがさ」

エンゲルはひつつかれたまま肩をすくめた。「いつものことだよ」

「そりゃあそうだけど、いつもよりひどいようじゃないか」

「あいつ、僕のこと嫌いなんだとき。みんな知ってるよ」

「何かあったってわけじゃないのかい？」

「僕は大丈夫。心配いらない」

「君はいつもそれだなあ」

オリバーが首にまきつけていた腕をほどく。その反動で、ちよつとばかり足元がよろける。彼はエンゲルよりも頭一つ分背が低いので、だいぶ背伸びしていたようだった。エンゲルは彼の腕をもってやった。

「デュータのこと、嫌いかい？」

ややあつて、声をひそめてオリバーが訊いてきた。エンゲルは腕をはなし、沈黙でもって聞き返した。べつに肯定したつもりも、否定したつもりもないただの沈黙だった。

友人は首の後ろあたりを適当にかきながら、言いづらそうに口もとを迷わせて、「君が来る前は、その……彼がちやうど君みたいなもんだったから」と、ぼそりといった。「たぶん、やっかんでるんだと思う」

エンゲルは気軽にほほえんでみせた。「わかつてるよ」

「僕、彼と特別親しいってわけじゃないけど。でも以前ちよつとだけ聞いたことがあるんだ……家族の事情ってやつがあるとか、そんなようなこと。そういうの、きみのような人にはあまりぴんと来な

いのかもしれないけど、エンゲル」

顔に浮かべたほえみを、エンゲルはそのままにしておいた。それを返事のすべてとした。このただただ善良でしかない友人が、今のときもそうであるほかに何ひとつ余計なものを持っているわけでないことを、エンゲルはじゅうぶん知っていた。

こういったときは、だまって受け流せばいいのだった。ただし注意深くあることをわすれてはいけない。そうだね、とも、ちがうよとも、言葉を発すべきではないのだった。言葉はすなわちうそになるからである。水を張った水がめにはどんな小さな針の穴すらも開けてはいけないことを、誰か疑う者があるうか。

エンゲルがほえみをたもっている間に、オリバーはとりつくろうように、さっと口調を変えていった。「ああ！　なんだか僕、いつもよいなことにばかり気を回しちまうようだ。ごめんよ、君がなんでもないっていうのなら、データーのことなんでそれでいいんだ、エンゲル。でもまだ後ろを振り向いちやいけないぜ、そうだな、これから教室に入って、席に座るまで。あいつ、まだこつちをにらんでいるからね」

エンゲルはわかったというように、手をあげた。「ところで――」

「ああ、そうだ。家族といえば、エンゲル」

オリバーはすっかり明るくなって、にこにここと、いつもの調子でこういった。

「夏季休暇には、君ももちろん家に帰るのだろうね、エンゲル？　僕なんて帰っても弟と妹がうるさくって、夏の間じゅうおもりをさせられるだけなんだ。君のところがうらやましいよ、さぞ――」

そこで時間が止まった。

エンゲルは、思わずまじまじとオリバーを見返していた。この一瞬、いったい何を言われたのか、本当にわからなかったのだった。

善良な、悪意ない、何も知らない友人の言った言葉が頭の中で意味を結ぶと、エンゲルはゆっくりと、これまで誰にも見せたことのない顔をつくった。すなわち、彼には非常に珍しい、実に中途半端

な——いつものように念入りに計算して作られたのでない中途半端な失笑を浮かべて、「もう一回言ってくれろ？　夏季——なんだって？」と、たずねるのがせいっぱいだった。自分の耳に届いた自分の声が、まるで自分の声でないように聞こえた。オリバーは少し不思議そうな顔をしたが、すぐに「だから、長期休暇さ」と同じせりふを繰り返したが、その声はもう聞こえていなかった。

聖エルンストには夏の間だけ二ヶ月にもおよぶ長い休暇があるということを、あれほどに周到なエンゲル・ミューラーはこれまで、まるきり頭の端にもものぼらせたことがなかったのだった。

どうかしていたとしか思えない。——夏季休暇！　夏期休暇だつて！

どうして今まで、そのことを一度も考えたことがなかったんだ？　もちろんその間、生徒は学校にはいられない。家に戻らねばならない。戻る家があるのだから。では、帰る家をもっていないものは？　オリバー・デーニッツのガラス玉みたいにすきとおった、無垢な目がいま、きょとんとエンゲルを見つめていた。

空はにごっていた。

第四話

【4】

エンゲル・ミユラーの変化は、はじめのうち、誰も容易には見破れなかった。

だが、着実にそれは始まっていた。十四歳の少年の、熱く息づいた心臓はこのとき、すでに軋み音をあげ始めていた。誰もそのことに気付かなかった。

何しろ彼は、中途入学してから実に半年もの間、決して変化をしなかったからである。いつもおだやかな微笑をごく自然にうかべ、どんなことも間違えたりせず、嫌われず、媚びることもなかった。彼の微笑みは彼のおそれるすべてのものから彼自身を覆い隠していた。それらが何かしらの原因でゆがんだりするときも、かならずそこには一片のほがらかさともいうべきしなやかな好意が残されていたのである。

彼の笑顔にうそのないことは、たずねれば誰もが口をそろえてそう言う事柄のひとつだった。彼のすること一片の隙もないことは、誰もが口に出さなくても知っていた。それらのことが、もはや周りの人間たちの目にしかと焼きついてしまっていたから、彼らははじめ、エンゲルの変化を見逃していたのである。

ミユラー少年はもちろん、ときにはいかにも血の通った人間らしく、ふざけたい盛りの十四歳の少年のようにふざけあったり、少しばかりの意地悪をしたり、じゃれたりする姿をみせることも忘れなかった。彼が完璧でありながら鉄でも石でも氷でもなかったのは、この絶妙な人間的魅力ともいうべきユーモアと、子供らしい笑みをするときに実にチャーミングに上がる口もとのためである。彼の持つ女性じみた顔立ちと華奢な肩は、そのとき、誰の心にも簡単にし

のびこんで鍵をあけてしまふほど無敵の魅力を発揮した。ひとたびそうしようと思えば、彼は信じられないほどあけすけに、その人にとって一番とつきやすく信頼できる、愛情を与うべき誰かとなり、全身から普遍の友情をあふれさせ、親密となることができた。ただしそのいかなるときにおいても、その美しい顔から神々しい祝福と光とがうせたことはなかったのである。

彼が武器としたのは、生まれ持った魔力ひとつだった。それは人を惹きつける魔力である。人にの心の深淵に取り入り、あやつるのは天使ではなく悪魔の力である。悪事が人を惹いてやまぬように、この種の魔力を持った人間は人を惹きつける。彼はその使い方をよく知っていた。あえてそれを表にはまとわず、別の名前と別のかたちに変えて体の奥深くに隠しもち、場面にあわせて絶妙な加減でにじませたり光らせたりすることによって、親しまれながらも近寄りがたい、威厳に満ちても愛される、完璧な優等生をつくりあげたのである。

エンゲル・ミユラーは常に光の中にいた。友人たちも、教師たちも、それをエンゲル・ミユラーという少年の性質としてあたりまえのように理解し、うけとめていた。実際、どこにでもいるものだ。他人より少しばかり多く祝福された人間というものは、どこにだっているものだ。めぐまれた人間。赦される人間。神の御手に触れ、神にほえみかけられたことがある人間。そういった人間は、いつの世も、どこの世界にも、それなりの比率でうまれてくるものである。とりわけ十四歳という特別な年齢のこのときに、少年たちの中にはときどき、こういう性質の者が出る。それらはみな他人を強くひきつける才能をもつ者である。その金の髪は美しく、深緑の目は美しく、肌は白く、手足は細長く、唇からこぼれる言葉は、せせらぎのように自然に誰の耳にもこちよい。それが聖エルンストのエンゲル・ミユラーだった。誰もがそう思っていた。ただし事実がそうでなかったことは、すでに述べたとおりである。エンゲル・ミユラーの魂は、祝福とはおよそかけはなれた予定表をさずけられ、

この世に引きずり落とされてきたのであるから。

彼がもしもほがらかで、生まれも育ちも人間性にも何ひとつ問題がないように見え、その心に何ひとつかげりのないように見える優等生であつたなら、それはつくり上げられたものである。鏡の中に築き上げられた虚構である。彼のまとうていた光とは、偽りの鏡でもつてあつめた偽りの光である。

エンゲル・ミユラーがエンゲル・ミユラーたりえたことは、本人以外の誰も知りえない理由でもって達成されていた偉業にほかならなかつたのである。

では最初に、エンゲル・ミユラーについて、何か形の見えない不穏なものを感じとることになるのは誰か？ それはオリバー・デーニッツだつた。

彼は大変なお調子者で、わすれっぽく、さほど頭の切れるわけではなく、こういつた学校にはそれほど多くみられるわけでないが確かに必ず存在する、ある種の歯車のような役割を持った少年だつた。彼が舎監生のエンゲルと同じ部屋を与えられているのはたまたまいくつか重なつてうまれた偶然のためであつたが、友人のこういつた微妙な変化を感じ取ることにかけては、彼はたいしたものだつた。それは確かにひとつの才能というべきものだつたかもしれない。善良で、おひとよしな少年のだけれどもが持つ才能である。それはエンゲルが持つ才能とは正反対のものである。影があつて光がある。エンゲル・ミユラーは影を消し飛ばすための光を作りあげた。オリバー・デーニッツは、影を照らすための光を持っていた。それらは反作用する。優等生ミユラーが誰にでも与える万全な優しさが、本人によつてつくり上げられ、念入りに研磨されたダイヤモンドであるならば、オリバーの持つ純粹無垢な優しさは、本人さえそれをそれと気づかない、まったく手付かずの天然石のようなものだつた。今さら言うまでもないことではあるが、あとから作られたり置かれたりしたのでなく、最初からそこにあるものが、もつとも強い。それこそ

が人の運命を決定づけるものである。そしてそれをこそ、才能と呼ぶ。

エンゲル・ミュラーも、無意識に彼にはいくらか心をゆるしていたようなふしもあった。オリバーはおそらく、エンゲルにとって最初で最後のよき友人たりえた少年だった。だがこの時点では二人ともがまだそのことに気づいていない。気づくのはずっと後である。ただしそのときはすでに、何もかも決定的に取り返しがつかなくなっている。このエンゲル・ミュラーの物語が悲劇に始まり、悲劇に満ち、悲劇に終わることはもはや動かすことのできない運命の匣のうちにあるが、彼らの友情が常にすれ違い続け、ついに成り立たず、祝福されず、世のあらゆる友人たちがするように、お互いにお互いを何のためらいなく友と呼ぶことができなかったことは、この物語における最も悲しいことのひとつだった。

こたびも、持ち前の篤い心と、なんにでも首を突っ込みたがるおせっかいな気性とが、彼にそれを気づかせた。それはこれから起こる一つの事件がきっかけとなる。

それでは何があったかというと、おぼえておられるだろうか、彼である。ディータ・ロベルトだ。彼はエンゲルの魅力にとらわれないうちの唯一の生徒だったことは、すでに述べたとおりである。彼はただひとりのカイン、ただひとりのユダだった。

ことの発端はディータ・ロベルトが、エンゲル・ミュラーを『告発』したことによる。

*

その夜、いつもと同じように十時過ぎ、ランプを手にして東館の見回りに出ていたエンゲルは、ふと廊下で足を止めた。足元に何か落っこちているのを認めたからである。

彼はしばしそのまま目をすがめ、それがたばこの吸殻であることを確かめた。彼はまいにち勉強するのであまり目がよくないほうであるが、この夜はランプの灯りと窓からさしこむ青じろい月明かりと、それから臙脂色のじゅうたんに白い吸殻は非常に目立つので、すぐにそれがそうと分かったのである。

拾い上げるために、エンゲルは用心深く身をかがめた。ランプを身体の脇において、吸殻を手についた。それはくしゃくしゃに潰されていたが、ずいぶん新しいように見えた。たった今捨てられたばかりのようだった。彼は考えこんだ。とするとこれは——ついさっき——今しがた——誰かが捨てていったものかもしれない。彼の脳裏に、ひとりの学友の顔が浮かんた。

彼は用心深く考えた。その誰かは、ひょっとして僕の足音を聞いて、あわててこれをここに投げ出し、どこかに身を潜めたのではないか？——今も。

エンゲルはゆっくりと立ち上がった。音を立てないように、そうとランプを取り上げて、火をぎりぎりまで絞った。そしていったん歩き出そうとしてから、また立ち止まって、考え直して火を消した。真つ暗闇というわけでなし、この見回りを毎日続けているのだから、もはやランプの灯りがなくてもそれほど困ることはなかったからだ。暗くなった廊下のまんなかで、彼は左右に目を巡らせた。

もしも彼ならば、あの大柄な同級生は、それでなくてもふだんから息遣いの荒いたちであるから——これは、本人は気づいてないようであるが——心臓がばくばくしているようなときは、なおさらそれがひどくなるはずである。数日前の件は見逃したが、二度目となればただですまされるわけにいかないのは、本人がいちばん分かっているはずである。

彼はじつと耳を済ませ、注意深く歩きはじめた。

そのときだった。眼前にさつと光がさした。とつさにエンゲルは腕を上げて目をまもったが、それが別の誰かの持っているランプの灯りであることがすぐに分かった。

利かない目をこじ開けて、エンゲルはいった、「だれ？」

「そこを動くな、ミュラー！ 偽善者め！」

探していたはずのディータ・ロベルトの声が、いやに決然と、彼の名をよんだ。

青白い月明かりの中に、いま、二人の少年が対峙している。彼らはまだ十四歳だ。若葉のような心臓は、みずみずしい血液に満ちて、今このときも拍動している。彼らは決して友人同士でなく、お互いのことを好きでなく、だが強烈に互いを意識せずにいられない、二つの若い魂である。

「僕がなんだって？」

「とぼけてもだめだぜ、エンゲル・ミュラー。きみ、その手にあるのはなんだ？」

エンゲルの目の前に、ランプを突き出すように掲げ、仁王立ちしているディータがいた。彼の太柄な体軀は暗闇とランプの灯りのなかでさらに大きく見えた。顔は勝利の笑みにゆがみ、目のなかには一点にとる炎があつた。

エンゲルは頭の中に事態がしみこむまで、実に十回もまばたきをして、ディータと自分の手のなかとを見比べた。「まさか、きみ——くしゃくしゃになった吸殻を指先だけでもって、よく見えるように目の前にかかげてみせ、

「これが僕のだと？」

ディータは冷笑した。彼はこちらを見たまま、「いつか尻尾を出すと思っていたのさ、なあ、優等生さま。そうだろ？」とわけのわからないことをいった。声色も、表情も、実に勝ち誇っていた。

エンゲルはといえばあまりのことにぼかんとして、しばらく今が今でないような、ここがここでないような、妙な気持ちをもったが、そのうちにぼつりと「きみ、ねぼけてるの？」と、間の抜けたことを言い返した。彼は間抜けではないが、ほんとうに何が起きているのかわからなかったのだった。ディータ？ ディータ・ロベ

ルト？　そこにいるのはほんとうにきみか？

「ねばけてるのは君さ。うっかり気を抜いてたつてわけか？」

「ちよつと待ってくれ。まさかきみが覚えてないってことはないだろうけど、僕は以前——そう、ほんの四日ほど前だ——ここで、同じようなことがあったのを覚えてるぞ。データー、これはなんだ？　どういふ真似だい？　台本をもらったおぼえはないが、これは何かのお芝居か？」

「それだとぼけているつもりか？　さあ、来るんだ、エンゲル・ミユラー！　僕と一緒に、先生の部屋にね。お裁きを願おうじゃないか」

ぐいと腕をつかまれて、エンゲルはここでもうやく、データー・ロベルトが何をしようとしているのか理解した。お芝居？　冗談ではない。なんとということか、彼は自分を失脚させようとしているのだ、こんなばかげたやり方で！　万に一つも身に覚えもない、こんなたばこの吸殻ひとつで！

「これ、きみのだつてわけか……」

エンゲルが静かにつぶやいた。

「これできみも終わりだな、そうだな？」

「データー。こんなことで僕を陥れたいなら、無駄だぞ」

「誰も信じないから？　たいした自信だ！」

ぐいぐいとエンゲルの腕をひっぱりながら、データーは冷たく突き放した声でいった。

「そうじゃない。ただ——」

「なんだい」

「わからない」

データーは鼻でわらった。「わからない？」

「ついこのあいだのことだよ、まさか忘れたつてわけじゃないだろう。きみのそのおきれいな顔にむかつて真正面からぶちまけてやったと思っただが、とするとありや夢だったかな！　そうか、そうかもしれないね、何しろあのあと、僕はお咎めひとつくらつていな

いのだから。あのくそつたれなたばこを下級生に売りつけたところを舎監生に見つかっちまったっていうのに、そんなことがあるもんか？ そうだね、エンゲル・ミユラー、あんなことは確かに夢だったかもしれない！」そして、わづかに目をふせて、こうつなげた。「ほんとうにあったことでも、証明するものがなきゃ、夢とたいして変わりないんだ」その声ばかりが一瞬、静かだった。

「そのことじゃない。僕がそんなに目障りなら、別のやり方にしろ。こんなんじゃ、きみは——」

エンゲルがふたたび抵抗すると、腕をつかむディータの手に、力がこもったようだった。凄い力だった。

体温のひくいエンゲルと対照的に、ディータはどこもかしこもまるで熱に浮かされたように熱かった。体の中にとじこめきれない熱い息を吐きながら、彼は力強く前に進む。

「ディータ？」

「いいから、来なよ、エンゲル・ミユラー。さあ、アイヒマン先生の部屋はすぐそこだ。ここを降りるのさ！ おっと、階段に足をひっかけたりしないでくれよ。うっかり大事な証拠を落つこととしてくれちゃ困る。まだちゃんと持っているな？ 手を見せてみる……よし、それでいい。さあ、行こうぜ。われらがアルブレヒト・アイヒマンなら、公正な判断をしてくれるに違いない」

「ディータ」

「何を言ってもだめだぜ。きみは裁かれるんだ、エンゲル・ミユラー」

「きみ、こんなことをしてうまくいくと思うのか」

ディータは答えないまま進んだ。エンゲルももはや抵抗をやめ、なすがまま引きずられるほかなかった。東館の端の階段を降り、右に折れたら、そのつきあたりがアイヒマン教師の部屋だ。彼は厳格で知られるレーベ・エドゥアルドよりもさらに厳格で恐れられる、ただひとりの教師である。彼の茶金の目はいつもほんのうすく開かれ、ただ何か容赦のない機械のように、生徒を律するためだけにあ

る。年齢も趣味も、家族のことも、誰も知らない。こういった教師は意外とめずらしくはない。どこにでもいる。彼らに共通することは、最も生徒から嫌われる種類の教師だということだ。

エンゲルは混乱した。こんなわけのわからない賭けをいきなり仕掛け、よりにもよってアイヒマン教師の自室へ行くというディータの考えに、なにかとてつもなく受け入れがたいものを感じた。あの種のおそろしささを感じた。アルブレヒト・アイヒマンのわからずやは有名だし、その話の通じにくさには、エンゲルも何度も辟易したことがあった。あんな堅物に、今このむずかしい、おそらくは複雑な問題をまかせるべきでないということを報す警鐘が、頭のなかで懸命に鳴り響いた。

注意しておくべきであるが、このときはまだ、彼はこの同級生の意図を読み取るに至っていなかった。ほんの少しぼんやりしていたためかもしれない。ここ数日、そうだった。とても重要なひとつの考え事のために、ずっと頭によくない霧がかかっていたのだ。だがいま、彼がしようとしていることがまずいことはよくわかる。それははっきりとしている。

エンゲルはきっぱりと、ただし強い口調でいった。

「そうしたきや、もつとましなやり方を教える。これじゃ駄目だ。僕がたばこなんか吸うわけないの、誰だって知ってる。アイヒマン先生だって、すぐ見抜く」

返事がかえってこない。エンゲルは腕を引っ張りもとそうとしたが、純粹に体格で勝るディータのほうがはるかに強かった。何しろ身長は頭ひとつ分、体重は十キロも違ったろう。彼はぐいぐいと、なんの迷いもなくエンゲルの腕を引っ張り続けた。ためらいもなく廊下を進み、やがてたどり着いたアルブレヒト・アイヒマンの私室の扉を、力強いこぶしで叩いた。なんと彼はノッカーさえ使わなかった。

「アイヒマン先生、アルブレヒト・アイヒマン！ 夜分すみません！ どうか僕のために起きてください！ 重大なお話があるのです

！

エンゲルはもはや不安に立ち尽くすのみだった。腕はまだ解放されていない。がっちりと絡めとられている。仕方なく下からディータの顔をうかがい見、そこでエンゲルは目を見開いた。思わず抵抗する腕の力がゆるんだ。逃れようとするのを忘れた。

そこに不可思議な表情があった。

アルブレヒト・アイヒマンの手によって内側から扉が開くまでの一瞬間、ごく数秒、そこには原始の静寂があり、時が凍りついていたのだった。

彼は、じつと――ごく平静な、それまでの狂ったような激情がうそのように、おそろしいほどの無表情でただ扉を見つめていた。そこにどんな感情のうねりもなかった。ただエンゲルの目に、そのディータ・ロベルトの顔は、そのままで焼きついた。レリーフのようにかたくなで、デスマスクのように虚無に満ちた、その顔一つ。波紋ひとつない水面のように平静を湛え、ただ静けさに満ちた顔が、じつと扉を見つめている。

このとき、裁きを待つ人間の顔をしていたのは、あらぬ罪で断罪されようとしているエンゲル・ミューラーではなく、むしろディータ・ロベルトの方であるように見えた。

第五話

【5】

ここで少しばかり閑話休題を許されたい。

ディータ・ロベルトの『告発』とは何だったのか、いったい何のためになされたことだったのかということを語る前に、まず彼について、いくらかのことを述べておかねばならないからである。彼は成績がよく、大柄できわめて明朗で、聖エルンストで最も目立つ生徒のひとりだった。同じ年代の少年が寄り集まって暮らすこの学校のなかでは、だいたい似たような性質をもつものがかたまつて友人となるのが常である。だが彼のような生徒はほとんどいなかった。それでいていつも友人たちにかこまれていた。彼を慕う下級生も多かった。

勉強も、運動も、彼はたいへんよくできた。赤茶の髪と、よく通る声は、どこにいても目印となった。そばかすさえ魅力にうつった。つまるところ彼は太陽のよく似合う生徒だった——じっさい、彼はいつも楽しみに笑っていて、豪胆で、細かいことを気にしなかった。腕力なら誰にも負けなかった。重たい荷物を運ぶとき、彼は人の三倍も運んだ。弱いものをかばい、下級生を助け、誰からも頼りにされていた。それがディータ・ロベルトである。その表向きの顔である。表向き、というのは、つまり彼もまた秘密をもっていたということである。その秘密とは？ 読者諸君は、ひよっとしたらすでに彼とおなじ秘密を持つ登場人物をご存じのはずである。

もっとも、このときの聖エルンストには、校長ロッテ・フランクも含めて、彼の生い立ちを正確に知る者はいなかった。そのために、こたびの『事件』が起こったとき、誰もディータの心中を正確に慮ることがかなわなかったのである。ここで閑話休題の形を借りて彼

の人生を語ることは、エンゲル・ミューラーの物語にはさほど必要ないかもしれないが、あえて筆者がそうすることを、ご理解いただきたいのである。

はたして人間の生きることとは、綱渡りにとても近い。今日うまく渡っていても、明日足を踏み外さぬことがないとは、誰にも言えないからである。あるいは生きることそのものが、どこで崩れるか、どこで倒れるか、それとも最後まで何事もなく渡りきるのか、誰にも予測のつかぬ孤独な興行だからである。

では、彼の場合はどうだったろうか？

事件が起こったのは六月なかばの夜だった。午後十時過ぎ、消灯後の東館にて、このときの主人公は二人である。エンゲル・ミューラーとデーター・ロベルト。ともに聖エルンストの誇る、輝くべき優等生である。そのデーター・ロベルト、彼がひとつの『告発』をする。奇しくもそれは、エンゲル・ミューラーが不穏な変化を始めた時期と一致する。その理由は？ この問いを、どうぞしばらくのあいだおぼえていていただきたい。

季節は美しい初夏である。長期休暇を近くにひかえ、夏の足音をすぐそこに聴き、誰もが浮かれているこの聖エルンストのなかで、いったい何がおきていたのか？

*

データー・ロベルトのいちばん最初の記憶は、降りしきる雪とその冷たいことだった。

彼はずっと北のはずれの、小さな村の生まれだった。名前はない。地図には確かに載っていたが、そんなことは誰も知らない。気に留めることもない。年がら年中畑を耕して、夜は小さなランプをと

して明かりとし、ほんの少しの粥のような食事をとれば、あとはそれっきりで一日が終わる村だった。教会さえない村だった。

そこには年に何度か、行商の馬車がやってくる。売っているものはさまざまだ。何を売っているのか、当の行商人にもよくわかっていないに違いない。彼らはただ、ところどころ破れた幌のなかにいろいろなものをどっさり詰めて、あぜ道をゆらゆら揺れながらやってくる。そのなかにはチーズがあったり、片方だけの靴下があったりする。壊れたランプもよくはいっている。聖誕祭が近くなれば、蜜ロウでかためた、かびのはえたプディングが並ぶ。だが誰も買わないので、ちかごろは通り過ぎるようにして行ってしまうこともよくあった。プディングを食卓にならべられるような金持ちは、この村にはいないからである。それがかびのはえていないプディングとなると、もう誰も見たこともない特別なものになる。

ほかに、年に何度かやってくるものは、教師と牧師と医者だった。それらは三つの施しとよばれる。この村の閉鎖的な人間たちが忌み嫌うもののひとつであり、同時に待ちのぞむもののひとつでもあった。

教師たちは、慈善のためにやってくる。ごく短い間この村にとどまって、ときどき子供たちを集めて、かんたんな読み書きや計算を教える。おかねは取らない。彼らはあくまでも施しのために来るからだ。そういうことになっている。ただし彼らには国からいくらかの金が出る——そんなことを誰が気にするものか？ 彼らはりっぱな服を着て、りっぱな言葉遣いをして、この村のものに触れる時にはハンカチをつかう。出来の悪い子供をなぐったりはせず、出来の良い子供を褒めもしない。

牧師は決まった時期にやってくる。聖誕祭や、祈願祭や、そういうときにきて、祝福をして帰っていく。だがこの村には教会がないので、そのことが彼を怒らせる。「教会のないところでどうやって説教をしろというのか？」

教会を建てると彼は言い、村人はできないという。そんな金はどう

ここにもないからだ。牧師はこの村に学がないこと、不衛生なこと、飢餓のひどいことをどうにかすべきだと主張する。この村に必要なのは教師と医者だと彼は言う。村人たちの答えはいつも同じだ。「一度でいいから、村の子供をこらんなさい」。それで近頃は、牧師もあまり来なくなつた。だから、人が死んだとき、この村に牧師がいたためしはない。

それでは医者かというと、やはり年に何回か呼ばれもしないのにやってきて、ひととおりの健康診断をやつて、それが終わると満足そうに帰つていく。病人がいても治療をしないし、助からない病人がいても、なにもしない。それは牧師の領分だ、と彼は言う。だからほんとうに病人が出たときに、医者がこの村にいたためしはない。彼の両親はディータが生まれたとき、ああこれでまた食いぶちが増えるといったきり、とくに祝福もしなかつた。彼が生まれたのは真冬の寒い時期だったので、赤ん坊ひとりぶんの暖房や食事や明かりが増えるのさえ、父と母は疎んじたのだった。その手間が増えることも疎んじた。彼らの心は長年の貧乏暮らしのためにすっかり擦り切れて、子供を愛することも忘れかけていた。ふた親からのただひとつの贈り物、ディータという名前が、死んだ馬の名前だったことを彼が最後まで知らなかつたのは、ディータ・ロベルトの人生における数少ない幸運である。

人として失くすべきでない何かが失われると、どうなるか？ 何も出来ぬようになるのではない。逆である。なんでもできるようになるのである。そういうとき、いろいろな取り違えがおこる。やつてはならぬこととそうでないことの区別がなくなり、觀念が何の力ももたなくなる。

家族を家族たらしめるのは、血であり、情愛である。とりわけ無力な子供は、親の情愛なくして生きてゆくことができぬ。家族は家族という名前だけでは、ただの集団にすぎぬ。血と、その血を特別たらしめる情があつてはじめて、家族は互いを家族として認め、守るに至る。それはある種の軌であり、かつ人と人を強く結びつける

箍である。それがなくなるとどうなるか？ 親が子を捨て、子が親を親とわからなくなるのである。

データーは雪の降る寒い日に、薄いおくるみに包まれて、村の裏手の雑木林の奥深くに置きざりにされた。その下に薄い木の片が置かれたことが、彼に与えられた最初で最後の優しさだった。彼が雪にうもれて泣いていたとき、ふた親は振り返らずに去って行った。それからしばらくして彼の祖母が拾いに来るまで、赤子は凍りついたまま泣いていた。生まれたばかりの魂は、ものの数日できよらかさを失った。祝福を与えられなかった魂は、冬の寒さと孤独に震え、愛よりも先に絶望を知った。

祖母はデーターを連れ帰ったが、これもまた、彼女が孫を愛していたためではなかった。ものの分かる歳まで育て上げれば、仕事をさせることができると思っただのである。育たなければそれまでだ。祖母はこのとき、同じ村の離れにひとりで住んでいて、データーの両親とはずいぶん昔に縁を切っていた。腰をわるくしており、目も悪くなりつつあった。彼女は娘夫婦が赤ん坊を捨てたと知って、「いらぬならあたしがもらっちまってもかまわないだろうね」といい、まるで使い古しの薪をもらってくるように、データーを拾ってきたのである。

祖母エリーザベトがデーターのためにしたことといえば、一日に何回かミルクをあたえ、着物をとりかえることだけだった。それ以外は泣いてもほうつておいた。あまりひどく泣くときは、戸口の外に出してやった。それでも、もともと丈夫に生れついているらしいデーターはさほどの病気をすることもなく成長し、赤子から幼児へ、幼児からこどもへ育っていった。そんなふうにして五年が経つ頃には、データーは祖母の身の回りの世話を通りいっぺんできるようになっていた。彼は栄養失調のためにやせっぽちで小さかったが、がりがりでひ弱な身体の内側に、何らかの力を溜め込んでいた。

データーの両親は、エリーザベトがデーターを育てていることを知っていたが、とくになにもしなかった。会いに来るでもなく、取

り戻しに来ることもなかった。彼らにとって、息子はもう死んでいたのである。いちど死んだ息子が生き返ってどこにいようと、もはやなんのかかわりもないのだった。

だから、ロベルト姓は祖母のものである。データーの母親はエマといい、父はヨーゼフ・ヴィトナーといったので、ほんとうは、データー・ヴィトナーというのがかれの名前になるはずであった。おなじ村で暮らしているうち、データーは同い年の子供たちにくらべて自分の育て親があまりに年老いていることに気づき、やがてあの村はずれのヴィトナー夫妻がどうやら自分のほんとうの両親らしいということを感じくにも至ったが、祖母エリーザベトが何も教えなかったので、彼はそのことを触れてはならぬ暗黙のなにかとして飲み込むことをおぼえた。データーはなにも問わなかった。生まれたときからずっと、重くて暗い、冷たい壁がじぶんを取り巻いていることを彼はちゃんと知っている。それには運命という名前がついており、絶望という名の鍵がかかっている。だからデーターは何も言わない。長いこと、素知らぬふりを続けていた。

転変は、データーが七つのところに起こる。

おだやかな初秋の午後であった。井戸のほとりで祖母の下着を洗っていたデーターに、自分よりも三つほど年長と思われる子供が声をかけてきた。その子は自分と大差ないぼろを着ていたが、自分よりいくらかは背が高いようで、頬にはほんの少しの赤みがさしていた。だが目や口元がずいぶんといじけているようにも見え、腕や足の細いのは、自分とまったくいっしょだった。細いくせに、しなやかなみなぎりと、内側にこもる熱と力とを持っている。はたらく子供の体だった。つまるところ、自分と同じようにこの貧しい村の中で、這い潜るように生き延びてきた子供のひとりだということだった。

データーは一瞬で理解した、ああ、これは僕の兄さんだ。少年はじっとデーターを見下ろし、データーもじっと見上げていた。交錯する視線のうちに、かすかに見えたような気がした赤い色を、彼は

血の色だと理解した。じつさい、その子供はヴィトナー家の長男で、名をアーベルといった。デイータが見抜いたとおり、まぎれもなく二人は兄弟であつた。

アーベルはエリーザベト婆さんの家にいるのが自分の弟だとずいぶん前から知っていた。デイータが生まれたとき、彼はもう三つで、自分に弟が生まれたことを理解できる歳だつた。その弟を布にくるんで真夜中に両親が行つたとき、彼はその後姿を戸口で見っていたのである。何が起きたのか、彼はぜんぶ知っていた。エリーザベト婆さんがデイータを連れて帰つたことも知っていた。彼はいつか弟に話しかけようと思つていた。その機会をずっと待つていたのである。彼にはひとつの命題があつた。そのために、デイータと口を利かねばならないことを知つていた。

「ねえ君」とかれは言つた。ささやくような声色であつた。デイータが返事をしようとするのをおしとどめて、つづけて口早にこう言つた。

「なにも言つちやいけない。僕らは何も知らないことになっているから。だけど、もうすぐだよ。椅子があくよ。そうしたら、君の番だ」

デイータはこの兄が何を言つていいのか、さっぱり分からなかつた。だからなにも返事をしなかつた。兄は最後まで名乗りもせず、「きつとだよ」といつて、きびすを返して去つて行つた。デイータはその後もしばらくぼうつぜんとしていたが、やがて戸口から出てきたエリーザベトに見つかつて、洗い物はまだ済まないのかい、と頭を二度こづかれた。

それから半年ほど経つたころ、葬儀があつた。デイータが兄の言葉の意味を知つたのはこのときだつた。花さえもないさびしい棺の中、やせ細つた子供がひとり、青じろい顔で眠っている。兄がそこにいた。

とむらいは簡素だつた。何しろこの村には前述したとおり教会す

らなく、牧師もいないのだ。集まった人びとは、通りいつぺんのお悔やみを投げて、また仕事にもどっていった。黒服をつけていない者さえいた。デュータは実に久しぶりにふた親を見かけたが、彼らは泣きもしなければ、わめきもしていなかった。すっかり擦り切れた棒きれのように、二人、ぼんやりと立っているだけだった。死んだ者は仕方ないと思っっているのか、それともどうでもよいと思っっているのか、何も見て取れぬ顔ふたつ、そこにぽっかりとういていた。エリーザベトはいつもどおり冷えた目をして、遠巻きに葬儀の様子をながめるだけながめて、娘夫婦に声をかけることもなく、うすい肩巻きを掻き合わせるようにしてそそくさとうちへ帰って行った。デュータは取り残されて、ずっと立ち尽くしていた。

うちからも、ほんとうのうちからも、兄の墓標からも遠い場所にぼつねんと立ったまま、そのときデュータは考えていた。はたして兄は、どうして死んだのか？ なにかよくない病気だったのか？ 偶然？ それとも、それとも——かつて口減らしで殺されかけた弟に、こんな形で自分の居場所を譲ったのか。

そうに違いなかった。兄に訪れた死の理由はわからなかったが、いつか兄が言ったことばは、こんなふう to 実現されたのだ。デュータはそのことをはつきりと知った。この何もかもが足りない村で、兄は死をもつてこの弟に、かろうじてひとりぶんの生きる権利を譲り渡したのだ。

ほとんど口も利いたことのない自分たちに、お互いの名前すら知らないままの兄弟に、はたしてどれほどの絆があったというのか。僕たちに流れる血の色は、きつととても薄かったのに違いない。血には名前など書いてやしないのだから。僕らが兄弟だということは、ほんのささいないたずらみたいなことにすぎないのだ。それなのに、どうしてこんなことになっちまったんだろうか。デュータは恐れ、混乱した。そしてとても悲しかった。

僕たちは生まれたときから別々に分たれてしまったのだ。運命にどんなやり直しがきくものか。知らんぷりしているしかなかったじ

やないか。僕は何もあなたに望んでやしなかった、あなたから居場所をとってやるうなんて思ったことはなかったんだ、僕らは最後まで知らんふりしていればよかったのに、あなたがそれを壊してしまった、だって僕らの間に、いたいどれほどの思い出があったというの、兄さん？

兄は兄なりに、弟に負い目をもって育ったとでもいうのだろうか、自分ばかりが親のもとに残されたことを、申し訳なく思っていたとでもいうのだろうか。いつかこんなふうに、僕のために死のうと決めていたとでもいうのか、兄さん、あなただって、幸せだったはずもないのに！

十やそこらの子供ひとり、どれほどに何を思いつめて死んでいったのか、推し量ることのできる者は、もうどこにもいないのだった。ただ彼の弟だけが、幼いまま死に、粗末に弔われようとしている兄の魂をほんとうの意味で見送ることができたのだった。それからしばらく、デイータは亡き兄の喪に服した。黒服などもっているはずもなく、タイもなかったので、彼はいつさい口を利かずに過ごすこととそれを示した。祖母は気味悪がってやめさせようとしたが、きかなかった。祖母の言いつけにさからったのは初めてのこともかもしれない。彼のなかで、何かが目覚めつつあった。彼はものを言わなくなった代わり、毎晩、夜更けまでじっと考え事をしていた。兄のことを忘れまいと彼は誓った。同時に、この絶望しかない村に、彼はあらためて絶望した。生れてこの方ずっと胸の中に渦巻いていたどろどろした暗いものに、彼はいよいよ向き合わねばならないと感じた。それがいったい何のためであるかを考えた。貧しさだ。貧困だ。彼は夜更けのベッドの中で、少しずつそれらを理解していった。貧しさから抜け出すには、何が必要か？ 彼はそのことを考えていたのである。死んだ兄の顔と、その葬儀で見たふた親の顔を思い浮かべながら、彼は考えていた。すべてこの貧しいのがいけない。彼はこのとき、はじめてそのことに気付きつつあった。少年の心に、考えることが芽吹こうとしていた。目がひらかれつつある。これま

で見えなかったものを、彼は見ようとしていた。もしかしたら、僕はたいへんなことを知らずに生きているのではないのか？ 僕を取り巻いているはずの冷たい壁は、重いはずの壁は、実は僕が思っているよりもずっと薄く、脆いんじゃないのだろうか？ だって僕は一度だってその壁を叩いてみたり、越えようとしてみたことがなかったのだ。そうだ、僕は、なにかしようって思ったことがどうやら一度もないようだ。この手は、この足は、まだ本当にしなきゃいけないことってものを、ちゃんと知ってさえいないんじゃないのだろうか。僕は一生このままだと思っていた。この村で、ゆうれいみたいにほそぼそと暮らして、あと何十年かしたら、死んで腐って土に還るだけだと思っていた。それが僕ってものの運命だと思っていた。でも、どうやら今、僕は生まれて初めてそのことを疑っているようだ。僕は一生このままか？ ほんとうに？ ほんとうに？

貧しいのがいけない。すべてはそれが問題なのだ。みんなみんな、貧しいのがいけないのだ。そうだ、では、貧しい者とそうでない者、何がちがうのか？ たとえば医者である。彼らは年に何度かこの村へやってくる。大きな馬車に乗っていて、よいものを着ている。あれらはつまり、裕福だからだ。それから教師である。彼らも時々まやってくる。年に何度か、ちよつとした読み書きや計算を教えに来る。あの人たちも裕福だ。すくなくとも、この村で死んだように暮らしている誰よりも裕福だ。閉ざされちまった穴倉みたいな村のなかで、光のことをまるで知らずに生きているような僕らとは違う。では、その違いとは？ 彼らとこの村は、僕は、何が違うのか？ 彼らはどうして、あんなにもまぶしくて、ほがらかで、うつくしくて、近寄りがたいのだ。僕はあんなふうになれないのか？ はたして僕は、ここから抜け出すことができないのか、一生このままか、それが運命か。ほんとうに？

——ほんとうに？

ディータ・ロベルトが、それからどうしたか？ 彼にとっては意

外なことが起きた。ふた親が迎えに来たのである。数年ぶりにエリーザベトのもとへやってきた母親エマは、ディータを引き取りたい旨をつけて、小間使いのいなくなることをしるエリーザベトのもとからむりやりディータを引きずって帰った。つまるところ、アーベルが亡くなったので、仕事を手伝うための手が必要なのだった。ディータはおとなしく連れて行かれた。「とつとといっちまいな」と、祖母は言った。

ディータは八歳になっていた。生まれてはじめて、ほんとうの家での暮らしが始まった。思っていたより冷たくはなく、かといってあたたかくもなかった。祖母の家にいたときと、やることはひとつも変わらなかった。ふた親はディータにほえみかけなかった。抱きしめたり、キスをしたりすることもなかった。この村で育つ子供の多くがそうであるように、役に立たなければ、おなかをすかせるだけだ。

ディータは働いた。働きながら、毎晩ねむりに落ちる前に、考えることを忘れなかった。祖母の家で考え続けていたただひとつのことが、彼をささえていた。胸のなかに秘めた、たったひとつの熱が、彼をあたため、勇気づけ、戦士に変える。その意思が、弱々しい手足に鋼の強さをやどらせる。想像は力を持ち、予感に、確信に変わる。

次に教師がやってくるのを、少年は辛抱強く待ちつづけた。その願いがとどいたのか、ほどなく、いつもの教師はやってきた。ディータはそれから毎日、彼の寝泊まりしている馬車に通いつめ、四日目に、やっと中に入れてもらうことができた。夜だったが、体を洗ってこないと入れてやらないというので、ディータは井戸水で一時間も行水をした。

教師はいつも人前に出るときつけている黒いマントを脱いで、たばこを吸っていた。赤髪で、色は白く、こうして見ると思っていたよりもずっと若い男だった。そしてディータの話を聞くと、「無理だ」とだけいった。

「おれは、お前みたいなことを言う子供を何人も見てきた。でもみんなだめだったんだ。ばかなことを言うなって、親に鼻血も出なくなるまでこっぴどく殴られたのもいた。わかるか？ こいつはお前のために言ってるんだ、今すぐ家に帰って、夢も見ないで寝ちまうんだ。背丈に合わないことをやろうとするもんじゃない」

デュータはあきらめなかった。同じ言葉をくどいほど繰り返した。「兄が死にました。僕のために死にました。僕はここから抜け出したいんです。頼れるのはあなただけです。どうかやり方を教えてください」

「都会で教育を受けたいと思うなら、お前の見たこともないような金が必要なんだ、わかってるのか？」

「あなたがやったことを、僕もやります。どんなことでも」

「なんてしぶといガキなんだ！」

それからさらに三日かかって、教師はついに根負けした。

*

彼が聖エルンストに入学したのは、それから二年後のことである。奨学金！ それが彼の未来をきりひらいた。教師が教えてくれたやり方は、デュータにとって、福音にもひとしい響きをもった。奨学金、ああ、それがあれば、僕も学校に行けるのだ。僕を助けてくれる人がいるのだ！

すぐれていれば、道はひらけるのだ。僕に足りないもの、それはやはり教養だった。僕の考えは正しかったのだ。デュータはそのことを知った。賢くなればここから抜け出すことができる、そうだ、僕はこんなところで終わりやしない。はじめから決められているわけじゃない、生まれたときから隔てられているわけじゃない、僕もあの人たちも、裸になればなにひとつ変わらない同じ人間だ。僕はこれまでそのことを知らなかっただけだ。あの壁を、冷たい檻を、超えるやり方があったのだ、この僕にもその機会是与えられるのだ。

向こう側へ行くのだ、奨学金をとればそれが叶う。すぐれた頭脳さえあれば、教養さえ身につければ！ 向こう側、こちら側じゃない、それが重要だ。僕はあの人たちと同じ世界で生きるのだ。

彼が十歳になったとき、またあの教師がやってきた。彼はディータのあまりに見違えたことに驚きを隠さなかった。みすばらしかった少年の目には清らかな知性の光が宿り、強い意思の炎が燃えていた。今度は、二人はまるで対等の人間のように話をした。教師はディータを馬車にあげ、茶をふるまった。

ずっとずっと西へいったところ、都に近い大きな街に、聖エルンストという名前のギムナジウムがある、と彼はいった。その校長は少々変わり者で、やたらお人好しなことで有名なんだがね、とも続けた。ディータはすぐに何のことか理解した。「僕はそこに行く？」

教師はにがにがしい顔をしていたが、もうディータはひるまなかつた。「どうすれば？」ともう一度たずねると、「試験に通る自信はあるか」と、教師はつぶやいた。

自信？ —— 自信はあるかだって！

ディータは吹きだした。迷うことも、おそれることも、なにもなかった。夢見続けた未来が、もはや手を伸ばせば触れるほどに、すぐそこにあつた。

さて、ディータ・ロベルトが聖エルンストの生徒になった経緯について、これでひととおり述べてきたことになるわけであるが、ひとつ語り残していることがある。そう、彼の両親についてのことである。おぼえておられるだろうか、ロベルトは、エンゲル・ミュラーにこういった、俺の親がどこにいるか教えてやろうか？ あの世さ！

これから語られることが、ディータ・ロベルトについての物語の最後の部分となる。すなわち、彼が家を、村を、ほんとうの意味で捨てることになるまでである。

両親は、もちろんデーターが学校へ行くことを反対した。はじめ、この子は何を言っているのかといったふうにとんよりにしていた二対の目玉は、やがてその意味を理解するにつれ、怒りの色に変わった。彼らは、息子が二年もの間こそと隠れてそのような夢を見ていたことにひどく憤り、落胆し、怒ったのである。ギムナジウムだって！ 都会だって！ いったいどこでそんな馬鹿げた知恵をつけられてきたのだろう、この息子ときたら、なんという身の程知らずだろう！

馬鹿な夢を見ることほど馬鹿馬鹿しいことはない。何も望まない、それがいちばん賢いのだ。美味しいものを食べたい、清潔な服を着たい、温かい寝床でねむりたいと願ったところで、いったい何になるだろう？ 現実がよけいに重くのしかかってくるだけである。望みは何よりも残酷である。ここでは希望は死神の鎌よりも冷酷で、絶望こそが友人となりうる。絶望は決して裏切らない。そのことを誰もが知っている。

明日も明後日も一年後も十年後も、毎日変わらずに畑をたがやし、ほんの少しのあかりを手にし、腹が膨れる日は永遠に来ず、なんの楽しみもなく、死んだように生き、死ねばそれまでだ。そういうはずれくじのような運命を押しつけられて、この村も、そこに住む人間も、孤独に滅びていくのだ。そう決まっているのだ、それなのに、それなのに、学校へ行きたいなどとほざくのだ、このろくでなしの馬鹿息子、いったいこれは何なんだ、どうしてこんなふうになっちゃうのだ、もう何もかも耐えられない！

このとき彼らが見ていたものは、深淵である、真理のなかの深淵である。そこには絶望が渦巻いている。血を吐く叫びがほとばしった。それは叫びだった。運命をいちども疑ってしまったものの持つ苦悩である。わずかでも外界を見てしまったものが持たねばならない渴望である。知らなければそれで済んだ、求めることなど知らずにいればよかったのだ、だがこの愚かな息子がもたらしてしまった、見てはならぬ光、舌に触れてはならぬ甘い味を、この息子が連

れてきて卓に載せてしまった、もう逃げられない、決して考えてはならぬただひとつのことから。彼らは狂わんばかりに叫んだ、言葉にならぬ声だった。ああ、神とやら、もしもそこにいるのなら、今こそ我々を救い給え、ここに仔羊がいる、迷うて、おびえて、苦しんでいる、さあ救え、今すぐに救ってくれ、それができぬというのなら、おまえこそがここへ来い、地獄へ落ちてくるがいい！

データーが動けなくなるほど殴ってしまつと、ふた親はお互いを罵り始めた。母親は汚れた爪で夫を引つ掻き、父はこぶしで妻をなぐりつけた。それは夜通し続いた。データーは床に転がって、半分つぶれたまぶたの隙間から、ただじつとその光景を見ていた。今すぐ誰か、気の利いた人がこの家に火を付けちまってくればいいのに、と彼は思っていた。そうして意識がゆっくりと途切れていくなかで、データーは聖エルンストの美しい外壁を、確かに見ていた。

翌朝目をあけると、静かになっていた。彼は全身にはしる痛みをこらえてゆっくりと起き上った。そうして、すぐ近くに、ふた親が並んで冷たくなっていてのを見た。二人ともぼろぼろだった。どちらが先にどちらかを殺したのか、あるいは二人とも同時に刺し違えたのか、それは分からなかったが、血はさほど流れているように見えなかった。ただ転がるように死んでいた。死に顔ばかりがきれいだった。畑に撒く虫よけでも飲んだのかもしれないが、もうどうでもいいと彼は思った。この人たちはこれで楽になったのだ。ようやく解放されたのだ。それならもうそれでいいじゃないか。

家じゅうをひっくり返し、ほんの少しの有り金をかき集めて、データーは逃げ出した。走り出すととまらなかった。はだしのままで駆けつづけた。

試験を受けるのだ、奨学金をもらうのだ。聖エルンスト、美しい白亜の学園へ、僕は行くのだ、もうほかにどこへだって行けやしない。この世の中に、僕の居場所はそこしかない。そこで何もかもやり直すのだ、闇を抜け出し、光の中で生きるのだ。

たったひとつ残された希望にすぎるようにして、少年は朝日の中

を走り続けた。そして、一度も振り返らなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9232z/>

アデラード

2011年12月29日00時56分発行